

友人・親への自己開示を通してみる青年期の友人関係と親子関係

須藤春佳^{*1} 梶原美咲^{*2}

The Relationship Between Adolescent Friendships and Their Self-Disclosure to Friends and Parents

SUDO Haruka^{*1} KUNIHARA Misaki^{*2}

*1 神戸女学院大学 人間科学部 心理・行動科学科 教授

*2 神戸女学院大学大学院 人間科学研究科 人間科学専攻 博士前期課程

連絡先：須藤春佳 sudo@mail.kobe-c.ac.jp

要 旨

現代青年における「友人関係の希薄化」と、「親子関係の友だち化」の現象は、思春期における親からの心理的な分離の遷延化の傾向を背景に、相互に関連しながら生じているのではないかと考えられる。本研究では、上記の関連について検討することを目的とし、大学生を対象に、友人関係と友人と親への自己開示の傾向について、調査を行い検討した。その結果、自身が傷つくことを恐れて閉鎖的な傾向にある「関係回避群」が、傷つけられることを避け楽しく振る舞う「群れ指向群」と、友人に気遣いオープンに接する「気遣い内面関係群」より友人に対する自己開示量が少ない傾向にあり、また友人より親に対して自己開示する傾向にあった。関係回避群が、保護者として自分を受容してくれ安心できる親に対しての自己開示は行えるが、友人に対しては傷つけられることを恐れて開示しない傾向にあり、友人より親を心理的なよりどころとしている傾向が高いためではないかと考えられた。群れ指向群と気遣い内面関係群では、親にも友人にも自己開示を同等に行っていることがわかり、親からの心理的分離の過程で、親と友人の両者を心理的なよりどころとしている状態が示されたと考察された。

キーワード： 青年期、友人関係、親子関係、自己開示

Abstract

The phenomenon of adolescent friendships is becoming weaker and the recent relationships between parents and their adolescent children more like friendships are thought to be related. This may be due to the prolonged adolescent psychological separation from parents. This study examines adolescent friendships, and the tendency of adolescents to self-disclose to their friends and parents. The self-disclosure scale and friendship scale was conducted with 108 university students. The results show that adolescents who were careful not to get hurt by their friends tended not to disclose much to them. In contrast, ① adolescents who were careful not to hurt their friends but developed emotionally close friendships, and ② adolescents who tend not to be hurt by friends and were friendly with friends disclosed much to them. Further, adolescents who were careful not to get hurt by their friends tended to self-disclose to their parents more than their friends. This suggests that adolescents may feel more secure self-disclosing to their parents, due to their unconditional acceptance. Thus, this group of adolescents may still be psychologically dependent on their parents despite their age. Notably, the other two groups of adolescents, tended to self-disclose equally to both their parents and friends. Thus, it is presumed that these adolescents are psychologically dependent both on their parents and friends during the period of psychological separation from their parents.

Keywords: adolescence, friendship, parent-child relationship, self-disclosure

I. 問題

1. 青年期の発達課題と親子関係・友人関係

青年期は、親からの心理的自立の途上にある時期であり、友人は、親からの心理的分離を促す契機となる重要な対象である。Blos (1967) は、青年期は「第二の分離-個体化」の時期であり、青年にとって重要な対象が親から仲間関係や友人に移行することの重要性を強調している。長尾 (1991) は、青年期の心理的発達プロセスについて、マラーの分離個体化過程を参照し、青年期の親からの分離-個体化過程の概要を整理し、青年の親からの心理的分離において、友人の存在が親と子の間に入り込む中間対象であることを図示している。分化期 (10歳～12歳) においては、子どもは親と子との中間対象として同性友人と交流する。続く再接近期 (12歳～15歳) では、子どもは物理的には親と距離を置くが心理的には母親に対抗して親に対して依存と自立のアンビバレントな感情が生じる。そして練習期 (15歳～18歳) では、物理的・心理的に親と距離を置き、孤独感や非哀感を補う意味で友人との交友関係が活発になり、理想自我の形成や移行対象としての友人の存在が意味を持つという。長尾 (1991) によると、特に練習期における友人との交友関係は、この時期が親からの分離に伴う悲哀感、孤独感とともに、容易ではない個体化を確立する上での葛藤から空虚感を抱える時期であり、分離-個体化を促進させる上で重要となり、友人が「移行対象」としてその役割を担うと述べている。このようなプロセスを考慮すると、思春期から青年期にかけ、親から友人に心理的なよりどころを移しながら、徐々に親からの心理的な分離を進めていく流れが、自然な子どもの心の発達プロセスと考えられる。

また、池田 (1997) によると、青年期は、親や教師、大人など権威者との「タテ関係」から、友人や仲間、社会とのつながりを指す「ヨコ関係」への発達がなされる段階であると指摘する。この過程で青年は親に庇護された世界から離脱し、新たに同一化しうる様々な対象を発見し、新たな立脚点から本格的に他者や社会を見るようになり、世界が急激に広がりが増すという。ヨコ関係においては、気の合った仲間と趣味や将来や職業観、学業、両親観など、ものの考え方や感覚を突き合わせ、共感的確認をすることによって新たな自己の世界を確保し確認することができるようになるという。このように、思春期から青年期における、親からの心理的な分離と自立という発達課題を乗り越えるにあたって、子どもや青年が同年代の仲間や友人と様々な物事を「共有」すること自体が大きな意味を持つと言える。

2. 現代青年の友人関係と親子関係

ところで近年、青年期の友人関係において、傷つくことを避け、互いに気を遣い合う関係性が特徴的であると言われて久しく (岡田, 2007, 土井, 2008)、いわゆる「友人関係の希薄化」が指摘されている。岡田 (2007, 2010) は、青年期における友人関係を「群れ指向群」「関係回避群」「個別関係群」の3つの群に分け、それぞれの特徴を検討した。群れ指向群は、深刻

さを避け、楽しさを求め、友人といつも一緒にいようとする傾向があり、関係回避群は、他人との内面的な関係を避け、あたりさわりのない会話ですませ、友人関係に距離をおいた関わり方をする事で傷つけあうことを避ける傾向がある。一方、個別関係群は、お互いの内面的な気持ちをさらけ出し、友だちと個別的で深い関わりを求め、友人に対して、「価値観の一致」のような抽象的な概念を重視する特徴があるとして、上述の希薄化とは対照的な群もあることが示されている。岡田の分類による3群の中で、現代的な特徴を示すと言えるのは、友人と個別的で深い関わりをしない、「群れ指向群」「関係回避群」のような友人関係であると考えられるが、これらの群は、友人との間で何を共有し、どのようなコミュニケーションをとっている（あるいはとらない）のだろうか。

一方、友人関係の希薄化と並行して、思春期以降の親子関係にも従来と比べて変化があると指摘されて久しい。「友だち親子」という言葉が市民権を得て久しくなるが、世代間の境界が弱まり、権威的な振る舞いを嫌う大人たちが子どもに対して物分りの良い親として接する傾向が増えているようである（須藤, 2021）。かつてのような、思春期の第二次反抗期が顕著にみられなくなったという指摘もあり（黒沢, 2010）、いわば、「親子関係の友だち化」（須藤, 2021）ともいえる現象が加速していると考えられる。

なお、筆者は、友人関係の希薄化と、親子関係の友だち化は、相互に関連し合いながら生じている現象であると考ええる。「親子関係の友だち化」現象の背景には、親からの心理的な分離と子どもの自己形成が求められる思春期に、いつまでも子が心理的に親元を離れず、同時に親が子を手放せない状態があるのではないだろうか。それゆえ、子どもは親から心理的に分離し友人を心理的なよりどころとすることができず、友人とは表面的なつきあいにとどまる傾向にあるのではないか。すなわち、「友人関係の希薄化」と「親子関係の友だち化」は、思春期における親からの心理的な分離の遷延化の傾向を背景に、親から友人へと心理的なよりどころを移行することが遅れているがために生じている現象の一端ではないかと考えられる。親からの心理的分離の過程で、自分について、自分の好きなこと、自分の悩みなどといった、様々な事柄を友人と共有することが大事であるならば、その共有する対象が友人か親かを調べることで、子の親からの心理的な分離の状態を調べることができるのではないかと考えられる。以上の問題意識を受け、本論では、「友人と親への自己開示」を切り口に、「友人関係の希薄化」と「親子関係の友だち化」のつながりについて検討することとした。

3. 友人間・親子間の自己開示

(1) 青年の友人への自己開示

自己開示とは、榎本（1997）によると、「自分がどのような人物であるかを他者に言語的に伝える行為」であり、自分の性格や身体的特徴、考えていること、感じていること、経験や境遇など、自己の性質や状態をあらゆる事柄を他者に話すことであるとされる。岡部・秋山（2008）は、大学生を対象に、友人とのつきあい方が自己開示に与える影響について検討した。その結果、気軽につきあっているが、特別深い付き合いをしない人（友人）へは「自分自身の関心ごとや目標などが開示される」のに対して、自分が思っていることをそのまま素直に伝え

ることができ、受け入れてくれる相互的な関係を持つ人（親友）へは「異性関係や性的なこと、悩んでいることなど、誰にでも言えないことを話している」傾向があるとした。このように、友人関係の持ち方によって自己開示される内容は変わり、親友に対しては悩みや他の人には言えないことも開示されることが示されている。一方、友人に対して積極的に自己開示を行わない関係性もある。森田・井上（2014）は、大学生を対象に「自己開示の深さと自己開示抑制の理由の関連」についての調査を行い、特に女性は「親しい同性の友人に対して弱みを隠したいために自己開示を抑制する人ほど、全ての深さにおいて自己開示をしない」と報告した。これらのことから、友人とのつきあい方によって、自己開示の深さが変化したり、自己開示を抑制する場合があることがわかっている。

また、自己開示の有無だけでなく、自己開示の深さを測定することで、友人への自己開示の内容やその意義について検討することができる。丹羽・丸野（2010）は、自己開示の深さを4つのレベルに分類した。最も浅いレベルⅠ「趣味」は、「一般的な自分の好みについての情報」であり、特に社会的常識から逸脱する趣味ではない限り、人格を疑われたりするものではないと言う。第2の深さのレベルⅡは、「困難な経験」であり、自分がこれまで経験してきたつらい体験やそれをどう乗り越えてきたかに関する情報である。第3段階のレベルⅢは、自分自身の「決定的ではない欠点や弱点」であり、それほど重要ではないが未熟と思われる自分自身の認知や情動の側面である。もっとも深いレベルⅣは、「否定的な性格や能力」であり、危険性を考慮してもなお開示することは、開示者が被開示者に対して、自分自身を受け止めてくれるだろうという絶大な信頼感を持っていることを意味すると述べる。このように、自己開示の深さは4つに分類され、レベルⅠは気軽に話しやすい内容であるが、レベルⅡは自分の過去についての話題であり、レベルⅢ・Ⅳは比較的ネガティブな話題であるため、レベルⅡ～Ⅳは開示する相手との関係性が影響すると考えられる。丹羽らは、初対面の人に対しては深層的な自己の情報ほど開示されないが、親しい友だちに対してはレベルⅢやⅣのような深層的な自己開示が多く行われると述べる。

これらのことから、友人との関係性と、自己開示の深さには関連があり、親友のような親しい友人には深い自己開示を行うと推測されるが、周囲の雰囲気と同調する傾向がある人は深い自己開示を行わないと考えられる。さらに、自己開示することによって、自分が傷ついたり、人間関係が悪化したりすることに恐れを持っている場合には、浅いレベルにおいても自己開示を行わないのではないだろうか。本研究で検討しようとする、岡田（2007）による友人関係3群に照らして考えると、「個別関係群」は友人に対して深い自己開示を行い、「群れ指向群」は深い自己開示を行わない、また「関係回避群」は友人に対して浅いレベルの自己開示も行わないのではないかと考えられる。このように、現代青年の友人関係のあり方と、自己開示の深さの水準は互いに関連し合うのではないかと考えられる。

（2）青年の親に対する自己開示

では、青年の親に対する自己開示の傾向に特徴はあるのだろうか。NHK 放送文化研究所（2012）の、「中学生・高校生の生活と意識調査」によると、中高生の男女を対象に「あなたが

悩みごとや心配ごとを相談するとしたら、主に誰に相談しますか」と尋ねたところ、「友だち」と回答したのは全体の50.0%であったのに対して、「お母さん」と回答したのは全体の31.8%であり、友人より少ないものの、母親に悩みを相談する人も多いことが示された。さらに上記のレポートでは、過去30年の推移をみると、中高とも「友だち」に相談する人が減り、「お母さん」に相談する人が増えていると示されている。また、先述の「友だち親子」が増えている現象と合わせると、現代青年においては、従来は友人に相談していた内容を、親に相談する傾向が高くなりつつあるのではないかと考えられる。よって、現代青年の親子関係を検討する上で、親に対する自己開示の水準や内容を、友人関係と比較し、検討する意義があると考えられる。

(3) 青年期の心理的発達と、親・友人への自己開示のバランス

一般的な発達過程において、青年期の自己開示の対象は、親か友人かの二者択一ではなく、友人と親の両方に行っている場合が多いと考えられる。例えば恋愛や友人関係に関する相談は友人に行うが、進路に関する相談は親に行うなど、内容によって、自己開示する相手が異なる場合があると考えられ、青年が自己開示を行う内容や深さは、友人ならびに親という対象により異なるのではないかと推測される。

ここで、友人と親に対する自己開示の内容や量が、親からの心理的分離の程度の異なる青年において、どのように異なるのか、という点について考えてみたい。例えば、親からの心理的分離が友人を介して移行過程にある青年、移行が進み親からの心理的分離が概ね達成された青年と、親に依存し心理的分離が未だなされていない青年では、親と友人に対する自己開示のあり方が異なるのではないだろうか。具体的に、親に自己開示する傾向が高い人はどのような友人関係を築き、友人にはどのような自己開示を行っているのか、反対に親に自己開示する傾向が低い人はどのような友人関係を築き、友人にどのような自己開示を行っているのか、という点について、本研究では検討することを目的とする。

以上を受け、本研究では、岡田（2007, 2010）によって分類された友人関係3群それぞれの、親と友人に対する自己開示のあり方を検討することを通して、親からの心理的分離の状態について考察することを目的とする。ここで、各群の親からの心理的分離における発達段階と、友人ならびに親への自己開示の特徴について、次のように考えた。

A. 個別関係群 この群は、友人間で親密な内面の開示を行うことができ、友人間において、安心できる信頼関係を構築できている人たちであると考えられる。個別的で深い関わりを求める傾向がある人は、友人間でお互いの内面的な気持ちをさらけ出し合う（岡田, 2007）特徴があり、自分の否定的な事柄も友人に自己開示しやすいと考えられる。友人間で個別的な深い関わりを持つことで、信頼関係が生まれ、自己開示した内容を外部に漏らさない、自分に関心を持ってもらえるといった安心感に繋がっているのではないか。この群は、深い自己開示を行っても、友人関係が悪化しないという信頼感があるため、友人に対して深い自己開示を行うと考えられる。また、個別関係群は、価値観の一致を重視して友人を選ぶ傾向があり（岡田, 2007）、親より友人の方が価値観を共有しやすく、親より友人を心理的なよりどころとしていると考えられるため、親への自己開示を積極的に行わないと考えられた。

以上のような友人関係を築いていることから、個別関係群においては、親子間の心理的分離が達成され、心理的なよりどころが友人に移行していると考えられるため、①友人に対して深いレベルの自己開示を行い、②親よりも友人に自己開示を多くするのではないかと考えられる。

B. 群れ指向群 この群は、友人との間で傷つくことを避けて楽しさを重視する人たちであり、深刻な内容を開示して友人から嫌われることや結果的に自身が傷つくことを恐れるため、友人に対して自分の否定的な事柄を自己開示しないと考えられる。自身の否定的な事柄を話すことにより、友人から嫌われる不安を感じ、趣味などの楽しく明るい話題を開示することでよい雰囲気壊さず、友人関係を円滑に維持しようとする傾向があると考えられる。そのため、友人に対して自己開示尺度のレベルⅠ「趣味」は自己開示するものの、レベルⅡ、レベルⅢ、レベルⅣの深い自己開示は行わないと考えられた。一方で、この群は友人間で円滑な関係を求めるが、他人から評価されたいという欲求を持つ（岡田, 2007）ため、友人に自己開示できない事柄を親に開示することで、この欲求を満たしているのではないだろうか。つまり、友人と家族への自己開示の深さを使い分け、深刻な友人関係を避けながらも、他者からの評価を得ようとする傾向が見られるのではないかと考えられた。

以上より、本群は、友人に対しては、否定的な事柄を共有して傷つくことを恐れるため、深いレベルの自己開示をしない傾向にあるが、友人とは共に楽しく付き合おうとする傾向にあり、心理的なよりどころを親子関係から友人関係へ移行する途上にあるのではないかと考えられる。よって、この群は、親からの心理的分離が途上にあって、友人に同質性を求め、同調傾向の高い友人関係を形成すると考えられ、①友人に対しては浅いレベルの自己開示は行うが、深い自己開示は行わない、②深い自己開示は友人ではなく親に対して行うのではないかと考えられる。

C. 関係回避群 本群は、友人と関わり傷つくことを恐れ、友人との関わりを閉ざしている群である。この群は内面的な関係を避けるという特徴があり、友人と距離を置いた関わりをする傾向がある（岡田, 2007）ため、友人に対して自己開示を行う傾向は低いと考えられる。友人に自己開示しないことで、友人との距離を置き、自分を守ろうとする傾向があるのではないかと考えられる。また、この群は自尊感情が低く、自分に否定的な感情を持っている（岡田, 2007）ことから、自己開示するには、相手が自分に関心を持っており、自分の話を聞いてくれるという信頼感がなければ、安心して開示することは難しいと考えられ、自身に関心を持ってくれていることが明確な親に対しては自己開示を行うのではないかと考えられる。

以上より、本群は、友人と関わることで傷つくことを恐れる群であり、友人と対等に関わる自信を持たず、友人に対して恐れを感じることから、親子関係から友人関係へと心理的なよりどころの移行が未だなされていないと考えられる。この群の青年たちの心理的なよりどころは親子関係にあり、親からの心理的分離はなされておらず、①友人間での自己開示は行わない傾向にあり、②親子間での自己開示を行う傾向があるのではないかと考えられる。

4. 本研究の目的

以上を受け、現代青年が、友人と親に対して、自己開示をどのように行うかを検討すること

で、友人関係と親子関係の関連や、子の親からの心理的な分離の状態を調べることができるのではないかと考えた。なお、本研究では以下の4つの仮説を立てた。

仮説1：個別関係群は、親よりも友人に自己開示する傾向が高い。また、友人に対して深い自己開示を行う傾向がある。

仮説2：群れ指向群は、親に対しても友人に対しても自己開示をする。自己開示の深さが相手によって異なり、友人に対しては浅いレベルの自己開示を行い、深いレベルの自己開示は行わない。親に対しては深いレベルの自己開示を行う傾向にある。

仮説3：関係回避群は、友人よりも親に自己開示する傾向が高い。友人に対しては自己開示をしない傾向が、親に対しては浅いレベルから深いレベルの自己開示を行う傾向がある。

仮説4：3群間の、友人への自己開示の傾向としては、個別関係群>群れ指向群>関係回避群の順に自己開示を行う。反対に、親への自己開示の傾向としては、関係回避群>群れ指向群>個別関係群の順に自己開示を行う。理由として、青年の親からの心理的分離が達成されている順に友人への自己開示がなされ、反対に親からの心理的分離が達成されていない順に親への自己開示がなされると考えられたためである。

II. 方法

1. 調査参加者

大学生を対象とした質問紙調査をオンライン形式のアンケート調査にて行った。実施期間は2021年7月～2021年9月であった。

2. 質問紙の構成

(1) 友人関係尺度

岡田 (2005) の「現代青年に特有な友人関係に関する尺度」を用いて、参加者がどのような友人関係の取り方をするかについて測定した。この尺度は、「現代青年に特有な友人関係に関する尺度」(岡田, 1999) に、項目が追加・検討された尺度である。下位尺度は、自分の内面を出さない「自己閉鎖」、楽しく円滑な関係を示す「軽躁的關係」、友人の内面に侵入することを避ける「侵入回避」、友人から否定的評価され心理的に傷つくことを避ける「傷つけられ回避」から構成されていた。「まったく当てはまらない」～「とても当てはまる」の6件法で、計42項目で構成された。

また、本調査における「友だち」の定義は、「同性の友人の中で最も親しい人」とし、その友人と出会った時期を、「小学校入学前」「小学校在学中」「中学校在学中」「高校在学中」「大学入学以降」の選択肢の中から1つ選んでもらった。

(2) 自己開示の深さの測定

丹羽・丸野 (2010) 「自己開示尺度」を用いて、調査参加者がどれほど自己開示を行っているかを測定した。この尺度は「何も話さない」～「十分に詳しく話す」の7件法で、全24項目から構成される。自己開示の深さレベルとして、最も浅いレベルⅠ「趣味」、レベルⅡ「容易

には克服できない困難な経験」、レベルⅢ「決定的ではない欠点や弱点」、レベルⅣ「否定的な性格や能力」に分類されていた。

本研究で、自己開示を行う相手は、前述の「同性の友人の中で最も親しい1人」と、「養育者のなかで、一番話をする人」に分け、両者を対象に、現在どれほど自己開示を行っているかについて、回答を求めた。「養育者のなかで、一番話をする人」については、想定した養育者を、「父親」「母親」「その他（自由記述）」の選択肢から1つ選び、回答を求めた。

(3) 個人属性

調査参加者の性別、年齢、所属、学年について尋ねた。

Ⅲ. 結果

1. 調査参加者

108名（男性は0名、女性は108名）が調査に参加した。調査参加者の平均年齢は20.64（SD = 1.22）であった。

2. 友人関係尺度と自己開示尺度の得点化

岡田（2005）に従って、友人関係尺度の得点化を行った。因子は岡田（2005）に従って、「内的な関係を避け、互いの内面に踏み込まないような関わり」を示す「自己閉鎖」、「楽しく円滑な関係」を示す「軽躁的關係」、「友人の内面に侵入することを避ける」ことを示す「侵入回避」、「友人から否定的評価をされ心理的に傷つくことを避ける」ことを示す「傷つけられ回避」として、下位尺度の得点化を行った。分析に用いた尺度および下位尺度は表1の通りである。

また、丹羽・丸野（2010）に従って、友人への自己開示の深さと親への自己開示の深さの得点化をそれぞれ行った。自己開示の深さレベルとして、最も浅いレベルⅠ「趣味」、レベルⅡ「困難な経験」、レベルⅢ「決定的ではない欠点や弱点」、レベルⅣ「否定的な性格や能力」をそれぞれ得点化した。自己開示尺度の各レベルの得点を、1項目あたりの得点として算出した。尺度および下位尺度は表2の通りである。

3. 基礎統計量の算出

友人関係尺度の得点（表5）と、友人・親への自己開示得点（表6）の記述統計量を算出した。自己開示尺度の各レベルの得点は、1項目あたりの得点として算出した（表6）。最も親しい同性友人と出会った時期の人数分布（表3）、一番話をする養育者の人数分布（表4）を求めた。

4. 友人関係の特徴における群分け

岡田（2010）に従って、友人関係尺度の下位尺度得点をもとに群分けを行った。Ward法によるクラスター分析を行い、3つのクラスタに分類した。また、クラスタごとに、各下位因子尺度得点の比較を行い、その特徴をもとにクラスター名を決定した。各クラスタの下位尺度得

点の平均値と標準偏差、ならびに分散分析結果を表7に示す。

第1クラスタは、自己閉鎖が中程度、軽躁的關係と傷つけられ回避が高く、侵入回避が低い傾向にあったことから、友人に対してオープンに接する傾向は低くはないが、傷つけられることを避けようと楽しく振る舞う群であると考えられることから、「群れ指向群」と命名した。第2クラスタは、自己閉鎖、侵入回避、傷つけられ回避が高く、軽躁的關係が低い傾向にあったことから、自身が傷つくことを恐れて友人に対して閉鎖的な傾向にあると考えられ、「関係回避群」と命名した。第3クラスタは、自己閉鎖と傷つけられ回避が低く、軽躁的關係と侵入回避が高い傾向にあったことから、友人に対して傷つけられることをおそれずオープンに接することができ、且つ友人に対して踏み込みすぎないよう気を遣いつつ楽しく振る舞う群である

表1. 友人関係尺度の項目 (岡田, 2005)

項目番号	項目内容
自己閉鎖	
9	本当の気持ちは話さない
1	自分の心をうち明けて話す
5	悩み事を相談する
15	落ち込んだときに話を聞いてもらう
17	あたりさわりのない会話ですませる
23	浅い付き合いにとどめる
35	自分の内面に踏み込まれないように気をつける
34	友だちの心の支えになろうとする
25	まじめな話題を避ける
37	まじめな話題になると冗談でごまかす
軽躁的關係	
8	ウケるようなことをする
4	冗談を言って相手を笑わせる
39	おもしろい話をする
16	友だちの前ではしゃぐ
41	友だちと一緒に騒ぐ
11	楽しい雰囲気になるようふるまう
侵入回避	
7	相手に自分の意見を押しつけないよう気をつける
27	友だちの内面に土足で踏み込まないようにする
12	お互いのプライバシーに立ち入らない
22	相手の気持ちに気をつかう
38	相手に甘えすぎない
14	友だちに心配をかけないように気をつける
26	お互いの約束をやぶらない
42	相手の世界に口出ししない
傷つけられ回避	
24	友だちから傷つけられないようふるまう
10	友だちから傷つけられないよう気をつける
13	仲間の前で恥をかかないよう気をつける
6	友だちから「つまらない人」と思われぬよう気をつける
2	友だちからどう見られているか気にする

表 2 . 自己開示尺度の項目 (丹羽・丸野, 2010)

項目内容
レベルⅠ：趣味
1 好きなもの (音楽・映画・服装など)
2 休日の過ごし方
3 最近の楽しかったできごと
4 最近夢中になっていること
5 趣味にしていること
6 楽しみにしているイベント
7 これから趣味としてやってみたいこと
レベルⅡ：困難な経験
1 困難な状況を誰かに助けてもらった経験
2 困難な状況を乗り越えるために頑張ってきたこと
3 つらい経験をどのように乗り越えてきたかということ
4 過去のつらい経験が現在どのように役立っているかということ
レベルⅢ：決定的ではない欠点や弱点
1 「少しダメだな」と前から思っているところ (時間にルーズ、など)
2 直さなければならぬと思っているが、なかなか直りきらないささいな欠点 (時間にルーズ、など)
3 ささいな欠点かもしれないが (時間にルーズ、など)、ときどき落ち込んでしまうこと
4 ある経験を通して「自分は少しダメだな」と思ったこと (遅刻した、など)
5 ささいな欠点 (時間にルーズ、など) について他者から心配された経験
6 ささいな欠点について日ごろ思い悩んでいること
レベルⅣ：否定的な性格や能力
1 自分の性格のすごく嫌いなところ (人の成功を素直に喜べない、など)
2 自分の性格のすごく嫌な部分が出しまったできごと
3 自分の能力についてひどく気にやんでいること
4 能力不足が原因で、目標が達成できなかった経験
5 能力で劣等感を抱いているところ
6 能力に限界を感じて失望した経験
7 自分のせいで人をひどく傷つけてしまった経験

表 3 . 「最も親しい同性友人と出会った時期」の人数分布

友人と出会った時期	人数
小学校入学前	12名
小学校在学中	20名
中学校在学中	22名
高校在学中	33名
大学入学以降	21名
合計	108名

表 4 . 「一番話をする養育者」の人数分布

一番話をする養育者	人数
父親	5名
母親	102名
その他 (祖母)	1名
合計	108名

表 5 . 友人関係尺度得点の記述統計

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
自己閉鎖	108	10.00	48.00	24.27	7.75
軽躁的關係	108	16.00	36.00	27.65	5.14
侵入回避	108	11.00	48.00	35.06	5.67
傷つけられ回避	108	6.00	29.00	16.63	5.08

表 6. 友人・親への自己開示得点の記述統計

	度数	最低得点	最高得点	平均値	1項目あたりの平均値	標準偏差
友人への自己開示レベルⅠ：趣味（7項目）	108	17.00	49.00	39.52	5.65	6.29
友人への自己開示レベルⅡ：困難な経験（4項目）	108	4.00	28.00	15.95	3.99	6.11
友人への自己開示レベルⅢ：決定的ではない欠点や弱点（6項目）	108	6.00	42.00	25.89	4.31	8.66
友人への自己開示レベルⅣ：否定的な性格や能力（7項目）	108	7.00	49.00	26.56	3.79	10.10
親への自己開示レベルⅠ：趣味（7項目）	108	13.00	49.00	37.49	5.36	8.88
親への自己開示レベルⅡ：困難な経験（4項目）	108	4.00	28.00	17.06	4.27	6.69
親への自己開示レベルⅢ：決定的ではない欠点や弱点（6項目）	108	6.00	42.00	25.77	4.29	9.75
親への自己開示レベルⅣ：否定的な性格や能力（7項目）	108	7.00	49.00	26.56	3.79	11.89

表 7. 全回答者および各クラスタでの平均・標準偏差およびクラスタ間での分散分析

	全体	第1クラスタ 群れ指向群	第2クラスタ 関係回避群	第3クラスタ 気遣い内面関係群	F値（上段） 多重比較結果 （下段）
友人関係因子					
自己閉鎖	平均 24.27	21.37	32.43	18.29	$F(2,107) = 66.81^{***}$
	SD 7.75	5.34	5.40	4.52	$3 < 1 < 2$
	n 108	49	35	24	
軽躁的關係	平均 27.65	29.92	22.74	30.17	$F(2,107) = 41.39^{***}$
	SD 5.14	3.99	3.27	4.45	$2 < 1.3$
	n 108	49	35	24	
侵入回避	平均 35.06	33.14	36.46	36.92	$F(2,107) = 5.60^{***}$
	SD 5.67	4.95	6.61	4.37	$1 < 2.3$
	n 108	49	35	24	
傷つけられ 回避	平均 16.63	17.65	19.29	10.67	$F(2,107) = 37.47^{***}$
	SD 5.08	3.85	4.66	2.68	$3 < 1.2$
	n 108	49	35	24	

と考えられることから、「気遣い内面関係群」と命名した。岡田（2007，2010）では「個別関係群」と命名されていた群が、本研究では気遣いつつ友人に対してオープンに接するという特徴のある群が抽出される形となった。

5. 友人関係クラスタと友人・親への自己開示の深さとの関連

友人関係群ごとの友人と親への自己開示の特徴を検討するため、友人関係のクラスタ（群れ指向群、関係回避群、気遣い内面関係群）×自己開示する相手（友人・親）×自己開示の深さ（レベルⅠ～レベルⅣの1項目あたりの得点）を独立変数とし、自己開示量を従属変数とした3要因分散分析を行った。クラスタ×自己開示する相手×自己開示の深さレベルの平均点は表8-1、分析結果を表8-2に示す。その結果、クラスタの主効果があり、自己開示量は、関係回避群が、群れ指向群・気遣い内面関係群より少ない傾向にあった。また自己開示の深さレベルの主効果

表8-1. クラスタ×自己開示する相手×自己開示の深さレベルの平均点（1項目あたり）

		友人への自己開示				親への自己開示			
		レベルⅠ	レベルⅡ	レベルⅢ	レベルⅣ	レベルⅠ	レベルⅡ	レベルⅢ	レベルⅣ
群れ指向群	平均値	5.89	4.38	4.83	4.30	5.44	4.53	4.63	4.02
	標準偏差	0.66	1.45	1.13	1.32	1.31	1.55	1.58	1.71
関係回避群	平均値	5.04	3.07	3.63	3.00	5.03	3.84	4.00	3.44
	標準偏差	1.01	1.17	1.26	1.08	1.29	1.54	1.35	1.39
気遣い 内面関係群	平均値	6.04	4.52	4.27	3.91	5.67	4.35	4.05	3.84
	標準偏差	0.69	1.56	1.85	1.68	1.07	2.01	1.99	2.04

表8-2. クラスタ×自己開示する相手×自己開示の深さレベルによる3要因分散分析

	SS	df	MS	F	多重比較
クラスタ	129.81	2	64.90	8.31***	関係回避群 < 群れ指向群、気遣い内面関係群
誤差	819.75	105	7.81		
自己開示の深さレベル	351.50	1	351.50	117.48***	Ⅳ < Ⅱ, Ⅲ < Ⅰ
自己開示の深さレベル×クラスタ	13.17	4.95	2.66	2.20†	
誤差	337.91	105	3.22		
自己開示する相手	0.00	1	0.00	0.00	
クラスタ×自己開示する相手	16.42	2	8.21	2.55†	
誤差	314.20	259.82	1.21		
自己開示の深さレベル×自己開示する相手	6.94	2.44	2.85	3.44*	
クラスタ×自己開示する相手×自己開示の深さレベル	1.81	4.88	0.37	0.45	
誤差	211.92	256.13	0.83		

*** : p < .01, * : p < .05, † : p < .10

表8-3. 交互作用の単純主効果と多重比較の結果

単純主効果	要因	水準	自由度	F値	多重比較
クラスタ	相手	友人	2	14.43***	関係回避群 < 群れ指向群、気遣い内面関係群
		親	2	2.01	
クラスタ	相手	群れ指向群	1	1.15	友人 < 親
		関係回避群	1	3.31†	
		気遣い内面関係群	1	0.64	
相手	自己開示の 深さ	レベルⅠ	1	3.94*	友人 > 親
		レベルⅡ	1	2.11	
		レベルⅢ	1	0.12	
		レベルⅣ	1	0.03	
自己開示の 深さ	相手	友人	3	79.65***	Ⅱ, Ⅲ, Ⅳ < Ⅰ、Ⅳ < Ⅲ
		親	3	31.83***	

*** : p < .01, * : p < .05, † : p < .10

があり、レベルⅣ、レベルⅡ・Ⅲ、レベルⅠの順に自己開示量が大きくなる傾向があった。また、①自己開示の深さレベルと自己開示する相手の交互作用、②クラスタと自己開示する相手の交互作用が有意傾向で、③自己開示の相手と自己開示の深さの交互作用がみられた。

次に、①自己開示の深さレベルと自己開示する相手の交互作用について、単純主効果の検定を行った結果、友人に対する自己開示においては、レベルⅠ（趣味）がレベルⅡⅢⅣより多く自己開示される傾向に、レベルⅢ（決定的ではない欠点や弱点）がレベルⅣ（否定的な性格や能力）より多く自己開示される傾向にあった。また、親に対する自己開示において、レベルⅡ（困難な経験）がレベルⅣ（否定的な性格や能力）より、レベルⅠ（趣味）がレベルⅢ（決定的ではない欠点や弱点）より多く自己開示される傾向にあった。

また、②クラスタと自己開示する相手の交互作用について、単純主効果の検定を行った結果、友人に対する自己開示において、関係回避群が、群れ指向群・気遣い内面関係群より自己開示量が少ない傾向にあった。また、関係回避群においては、友人より親に多く自己開示する傾向が有意傾向でみられた。

さらに、③自己開示する相手と自己開示の深さの交互作用について、単純主効果の検定を行った結果、友人に対する自己開示は、レベルⅠがレベルⅡⅢⅣより多くなされる傾向にあり、レベルⅢがレベルⅣより多くなされる傾向にあった。対して親に対する自己開示では、レベルⅡがレベルⅣより多くなされる傾向にあり、レベルⅠがレベルⅢより多くなされる傾向にあった。

IV. 考 察

1. 仮説の検討

以下ではまず仮説の検討を行う。

仮説1：個別関係群は、親よりも友人に自己開示する傾向が高い。また、友人に対して深い自己開示を行う傾向がある。

今回の結果では「個別関係群」は抽出されず、「気遣い内面関係群」が抽出されたことから、この群について検討する。気遣い内面関係群では、全ての自己開示レベルにおいて、友人に対する自己開示量と親に対する自己開示量に有意差はみられなかった。なお、友人に対する自己開示量は、関係回避群よりも多い傾向にあった。よって、「友人に対して深い自己開示を行う傾向がある」は部分的に支持された。

仮説2：群れ指向群は、親に対しても友人に対しても自己開示をするのではないかと。自己開示の深さが相手によって異なり、友人に対しては浅いレベルの自己開示を行い、深いレベルの自己開示は行わない。親に対しては深いレベルの自己開示を行う傾向にある。

今回の結果では、群れ指向群において、友人に対する自己開示量と親に対する自己開示量に差はなかった。なお、自己開示の深さレベルにおいても有意差がみられなかった。よって仮説2は支持されなかった。

仮説3：関係回避群は、友人よりも親に自己開示する傾向が高い。友人に対しては自己開示をしない傾向が、親に対しては浅いレベルから深いレベルの自己開示を行う傾向がある。

今回の結果では、関係回避群において、友人よりも親に自己開示する傾向がみられた。自己開示のレベルについては、親と友人で有意差がみられなかった。よって、仮説3は部分的に支持された。

仮説4：3群間の、友人への自己開示の傾向としては、個別関係群＞群れ指向群＞関係回避

群の順に自己開示を行う。反対に、親への自己開示の傾向としては、関係回避群>群れ指向群>個別関係群の順に自己開示を行う。

今回の結果では、友人に対して、関係回避群が、群れ指向群・気遣い内面関係群より自己開示量が少ない傾向にあった。なお、親への自己開示量については、3群間で有意差がみられなかった。よって、友人に対する自己開示において、関係回避群が最も少ないという結果が示されたため、仮説4は部分的に支持された。

2. 友人関係群ごとの自己開示の特徴

友人への自己開示量は、関係回避群において、群れ指向群・気遣い内面関係群よりも少ないと示された。関係回避群は、自己閉鎖、侵入回避、傷つけられ回避が高く、軽躁的關係が低い傾向にあったことから、自身が傷つくことを恐れて友人に対して閉鎖的な傾向にあると考えられる。この群が他の群よりも自己開示を行わなかった理由として、前述の傾向と同時に、「自尊感情が低く、相手を傷つけたり、傷つくことを恐れる傾向」（岡田, 2007）とも関連していると考えられる。福森・小川（2006）は、自己開示によって傷つくことを予測すると、周囲から自己開示を求められるような状態に至った場合に、「集団から排斥され孤立することよりも、傷つきを避けて自ら人間関係から距離をおくことの方が本人にとっては受け入れやすくなる」と述べている。関係回避群は、友人間で相手を傷つけたり、傷つくことを避ける傾向があるため、自己開示によって友人関係を形成することよりも、傷つくことを回避することを優先して、自己開示を行わない傾向にあるのではないかと考えられる。

群れ指向群は、自己閉鎖が中程度、軽躁的關係と傷つけられ回避が高く、侵入回避が低い傾向にあったことから、友人に対してオープンに接する傾向は低くはないが、傷つけられることを避けようと楽しく振る舞う群であった。相手を傷つけることは恐れないが、自身が傷つくことを恐れて自身の率直な思いを表出する傾向は中程度であり、本音を出して付き合うというより楽しく付き合う傾向がある。そのため、友人に対して距離を置く関係回避群よりも自己開示を行う傾向がみられたのではないかと考えられる。

気遣い内面関係群は、今回の研究で新たに見出された特徴をもつ一群であり、自己閉鎖と傷つけられ回避が低く、軽躁的關係と侵入回避が高い傾向にあったことから、友人に対して傷つけられることを恐れずオープンに接することができ、且つ友人に対して踏み込みすぎないよう気を遣いつつ楽しく振る舞う群とされた。この群は、関係回避群に比べて、友人に対して自己開示をする傾向が高いことがわかった。友人に対してオープンマインドでありながら、相手を傷つけないよう気遣いながら楽しく振る舞うこの群の青年たちは、友人から距離をとって付き合う関係回避群に比べて、友人に対して自己開示をする傾向が高くなったと考えられる。

本研究で、群れ指向群と気遣い内面関係群の間に、自己開示量の差がみられなかった点について、今回抽出された「気遣い内面関係群」と、岡田（2007）の個別関係群との質的な違いがあるためではないかと考えられる。岡田（2007）の個別関係群は、自身の否定的な側面も含めて、全面的に友人を信頼して自己開示する友人関係を持つ群であったが、今回抽出された気遣い内面関係群は、友人に対して一定の距離を保ちながら楽しく自身のことをオープンにする傾

向がある群であり、当初想定していた「個別関係群」とは質を異にすると言える。友人に対して相手を傷つけないよう、不快な思いをさせないようにという気遣いが優勢である点が特徴的であり、自身はオープンに接するが、友人との間で双方向性のあるコミュニケーションを行っているかについては疑問の余地が残る。「気遣い内面関係群」と「群れ指向群」では友人に対する自己開示量に差がなかったわけであるが、内容を問わない自己開示量全体の傾向は、友人間での会話量の特徴と同様の傾向を示すと考えられるのではないかと考えられる。よって、友人に対してオープンに接する「気遣い内面関係群」は、友人と楽しく付き合う「群れ指向群」と比較した際、友人間での自己開示量全体において、差がなかったのではないかと考えられる。

3. 親に対する自己開示と友人に対する自己開示の違い

(1) 自己開示のレベル（内容）の違い

まず、対象者全体を通して、レベルⅠの自己開示は、親より友人に対して行われる傾向にあった。趣味のような気軽な内容の自己開示は、親より友人を選んで行われると言える。同世代を生きる友人の方が、異世代である親とより、趣味の内容を楽しく共有できるためではないだろうか。

次に、自己開示の深さについては、友人に対しては、レベルⅠ（趣味）がレベルⅡ～Ⅳよりも多くなされる傾向にあり、レベルⅢ（決定的ではない欠点や弱点）はレベルⅣ（否定的な性格や能力）よりも多くなされる傾向にあった。友人に対しては、軽いレベルの内容である趣味についてが、その他の内容よりも自己開示しやすいのだろう。また、友人に対しては、自身の否定的な性格や能力より決定的ではない欠点や弱点の方が自己開示しやすい傾向にあった。自身の嫌いなところ、劣等感というネガティブな自己開示は深刻味を帯びたものとなりえ、自己開示するにあたって友人が受け止めきれず、相手の心理的な負担となる可能性があることを懸念するのではないかと考えられる。また、自身も受け止めてもらえないかもしれない不安から安心感をもって話せないのかもしれない。対して、決定的ではない欠点や弱点の方は、友人に開示しても軽く受け流される可能性があり、友人との会話が深刻味を帯びる可能性は低いと考えられ、友人に開示しても自尊心が揺らがないう程度の自分の弱点を、笑い話のように話す形の自己開示がなされやすいのではないだろうか。

対して、親に対する自己開示では、レベルⅡ（困難な経験）がレベルⅣ（否定的な性格や能力）より、レベルⅠ（趣味）がレベルⅢ（決定的ではない欠点や弱点）より自己開示される傾向にあった。青年は、親に対しては、自身が経験した困難なことを積極的に自己開示するのに対して、能力や性格については自己開示しないことがわかった。子の能力や性格といった素質については、親は熟知しており、改めて子が親に開示することでもなく、子はむしろ自身が経験した困難な経験を親に分ち合ってほしいのかもしれない。決定的ではない弱点より趣味が自己開示されやすいことについては、親子間では子は自分のネガティブな側面より楽しい趣味の話題を選んで話す傾向にあると言えるだろう。ここには、親子間であっても、ネガティブな話よりは楽しい話を選んで行い、楽しく円滑な関係を指向するという傾向が表れており、昨今の青年の親子関係における「友だち親子」のような性質が表れている可能性も考えられる。

(2) 友人関係群ごとの特徴

友人と親に対する自己開示で差がみられたのは、友人関係群のうち、関係回避群においてであった。関係回避群では、友人より親に対して自己開示がなされる傾向にあった。この傾向は、仮説3を支持するものであった。そのほかの2群（群れ指向群、気遣い内面関係群）では、親と友人に対する自己開示量に差はみられなかった。関係回避群は、自身が傷つくことを恐れて友人に対して閉鎖的な傾向にあり、岡田（2007）によると、自尊感情が低く、相手を傷つけたり、傷つくことを恐れる傾向があると示されている。友人に対しては傷つくことを恐れて自己開示をしない傾向にある本群が、親に対しては友人より自己開示する傾向があることがわかった。この背景には、関係回避群が、その他の2群より、友人よりも親を心理的なよりどころとしている傾向が高いためではないかと考えられる。保護者として自分のことを受容してくれ、安心できる親に対しての自己開示は行えるが、友人に対しては傷つけられることを恐れて開示しない傾向にある。このような現象の背景には、この群が親からの心理的分離の過程が進んでおらず遷延化している可能性が推測され、親に対しては自身の思っているところを開示することができるが、友人に対しては回避的な傾向があるのではないかと推察される。

岡田（2007）は、関係回避群が、関係の距離を保って必要以上に近づかないような友達付き合いをし、友達との深い関わりを避ける傾向が他の群に比べ高いこと、「ふれあい恐怖」に近いグループであることも指摘している。加えてこの群は、対人状況において円滑に振る舞えないという意識は低くないが、「関係的自己意識」や「内省的自己意識」が他群よりも低く、他人の目に移った自分の姿についての不安や、自分自身の内面的な不安をあまり感じていない傾向について述べている。従来型の対人恐怖をもつ青年とは異なる性質をもつ「ふれあい恐怖」であるが、自分自身に対する関心の低さがその特徴であると指摘する。これらの特徴を考慮すると、関係回避群は、自分について関心が低く、友人との距離を保つ一方で、今回の結果から親への自己開示が多くなされる傾向にあったことから、3群の中ではもっとも自己意識の芽生えが乏しく、葛藤をもたずに親に心理的に依存しているのではないかと推察される。

群れ指向群と気遣い内面関係群の、友人と親に対する自己開示の傾向に差はみられなかったが、両群は親にも友人にも自己開示を同等に行っていることがわかった。自己開示の深さを示すレベルにおいても、群間で対象別に自己開示量の違いはみられなかったが、親からの心理的分離の過程で、親にも友人にも自己開示を行い、両者を心理的なよりどころとする青年たちの姿が示されたと言えるだろう。

V. まとめと今後の課題

本研究では、青年の友人関係スタイルによる、友人と親への自己開示の傾向について検討した。その結果、友人関係群ごとに、親や友人への自己開示を行う深さにおいては特徴はみられなかった。一方、自身が傷つくことを恐れて閉鎖的な傾向にある「関係回避群」が、傷つけられることを避け楽しく振る舞う「群れ指向群」と、友人に気遣いオープンに接する「気遣い内面関係群」より友人に対する自己開示量が少ない傾向にあり、また友人より親に対して自己開示量が多い傾向にあった。このような傾向があったことについて、関係回避群は、大学生にお

いてなお、友人より親を心理的なよりどころとしている傾向が高く、親からの心理的な分離が遷延化している一群として考えられるのではないかと推察された。「群れ指向群」と「気遣い内面関係群」では、親にも友人にも自己開示を同等に行っていることがわかり、親からの心理的分離の過程で、親と友人の両者を心理的なよりどころとしている状態が示されたと考えられた。

また本研究では、親と友人への自己開示の特徴から、友人関係3群の親子関係の特徴について考察を行った。今回の調査では親子関係の実際については尺度を用いて測定できておらず、友人と親への自己開示の傾向を通して親子関係を推測した形になっているため、今後は実際に友人関係と親子関係の両方を同時に測定して検討することが課題として残された。なお、今回は女子学生のみを対象としたため、男性も対象に検討することが求められる。

なお、本研究では岡田（2007）の下位尺度を用いて群分けを行ったにもかかわらず、岡田（2007）で形成された「個別関係群」が抽出されず、代わりに「気遣い内面関係群」が抽出された。従来のように、友人に対して深く親密にかかわる群ではなく、友人に対して相手を傷つけないように気遣いながら自身の内面を開示するという群が出現した点も大きな特徴である。今回の結果から、友人と関わる上で、気遣いが優勢な現代青年の特徴が表れたのではないかと考えられる。

引用文献

- Blos, P. (1967). *On Adolescence*. Free Press, New York. 野沢栄司訳 (1971) 青年の精神医学. 誠信書房.
- 土井隆義 (2008). 友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル. ちくま新書.
- 榎本博明 (1997). 自己開示の心理学的研究. 北大路書房.
- 福森崇貴・小川俊樹 (2006). 青年期における不快情動の回避が友人関係に及ぼす影響—自己開示に伴う傷つきの予測を媒介要因として. パーソナリティ研究, 15, 13-19.
- 池田豊應編著 (1997). 不登校 その多様な支援. 大日本図書.
- 黒沢幸子 (2010). 「友だち親子」の光と陰—危うい「よい子」と「乙 Men」現象— (2009年実施 第2回 子ども生活実態基本調査報告書—小学生～高校生を対象に). Benesse 教育研究開発センター研究所報, 59, 20-23.
- 森田美雪・井上直子 (2014). 大学生の友人関係における自己開示の深さと自己開示抑制の理由の関連—親しさの違いと性差に着目して—. 桜美林大学心理学研究, 5, 65-74.
- 長尾博 (1991). ケース青年心理学. 有斐閣ブックス. 有斐閣.
- NHK 放送文化研究所 (2012). 「中学生・高校生の生活と意識調査・2012」について
(<https://www.nhk.or.jp/bunken/summary/yoron/social/pdf/121228.pdf>)
- 岡部未来・秋山幹男 (2008). 女子大学生の友人関係に関する研究—友人とのつきあい方が自己開示に与える影響—. 心理教育相談センター年報, 16, 35-42.
- 岡田努 (1999). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察. 教育心理学研究, 4, 3354-363.
- 岡田努 (2005). 現代青年の友人関係・ライフイベントと自己の発達に関する研究. 金沢大学文学部論集 行動科学・哲学篇, 25, 15-32.
- 岡田努 (2007). 現代青年の心理学 若者の心の虚像と実像. 世界思想社.
- 岡田努 (2010). 青年期の友人関係と自己. 世界思想社.
- 須藤春佳 (2021). 「親子関係の友だち化」の検討—青年期女子の母娘関係と自尊感情を通して—. 神戸女学院大学論集, 68(1), 77-90.
- 丹羽空・丸野俊一 (2010). 自己開示の深さを測定する尺度の開発. パーソナリティ研究, 18, 169-209.

(原稿受理日 2023年2月20日)